日本キリスト教会　広島長束教会だより

ミニバラ No.41

〒731-0135　広島市安佐南区長束 3-32-16

TEL/FAX
082-238-3459

2013 年 7 月発行

放蕩息子と呼ばれた男

「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。」
（ルカによる福音書 15 章 21 節）

ある人に二人の息子がいました。弟息子は父親に言いました。「お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください」。

弟息子は自分で汗してかせいだのでもない財産を、もぎ取るようにして受け取ると、さっさと家を出て行きました。彼が向かっていったのは遠い国です。金さえあれば何でも出来ます。こうして彼は何をしたのでしょう。放蕩に明け暮れ、ついに全財産を使い果たしてしまったのです。弟息子は毎日の食べものにも困って、豚の世話をする仕事をしました。しかしひどい飢饉のために、豚の食べるいなご豆さえも食べることが出来ない、もう豚以下の生活になってしまったのです。

彼はどこで人生のねじを巻き違えたのでしょう。彼は父親のもとでは自由がなく、自分らしく生きることが出来ないと考えたのです。「遠い国」は自由の天地でした。なるほどそこでは、自分の欲望のままに生きることが出来ました。しかし、それは彼を真に生かすことにはならなかったのですから、彼の試みは失敗に終わったと考えなければなりません。

このような悲惨のどん底の中で、彼は我に返り、父親のもとに帰ることにしました。我に返るとは本来の自分に帰ることです。彼の陥った悲惨な状況が、彼の気持ちを転換させたのです。しかし人間は悲惨な状況に陥った時にいつも、我に返ったり、本来の自分に帰ることが出来るわけではありません。精神を病んだり、自ら命を絶ってしまう等、悲惨な状況からさらにもっと悲惨な状況へと向かって行く人だって、少なくないのです。しかし幸いなことに、彼には帰る家がありました。

こうして弟息子は、罪と恥にまみれた思い出しか残っていないその地をたち、父親の家に帰ってゆきました。この息子の帰るのを一日千秋の思いで待っていた父親は、遠くからこの子を見つけ、一目散に駆けて行きました。弟息子はかねて心のうちで何度も繰り返していたお詫びの言葉を言いましたが、父親はその言葉を最後まで言わせませんでした。そして、盛大な祝宴を催しました。父親のこの態度は全く信じがたいほどでありました。

――主イエスがなさったこのお話には、神の愛の究極の姿が現われています。ここには福音、すなわち良い知らせの本質が語られているのです。もっとも、父親にあのように迎えてもらった人がどれほどいるでしょうか。

ある国で、親にさんざん迷惑をかけた青年が牧師を訪ね、親の許に詫びを入れて帰りたいと言いました。牧師は放蕩息子の話を出して、きっと君のお父さんもあのように迎えてくれるにちがいない、早く帰ってあげなさいと言って彼を励まして送り出しました。しかし数日後、牧師がこの青年に会うと、彼は浮かぬ顔をして、「あの話とは全く違って、どなりつけられて、追い出されてしまいました」と言ったそうです。

もちろん放蕩息子の罪を赦してあたたかく迎えてくれる父親もいるでしょうが、このように追い返してしまう父親も多いと思います。ですから、この話をそのまま人間社会の現実として受け取ってしまうことは出来ません。ただ、だからといって、これが絵空事だとは決して言えないのです。ここには、神と人間の間に起こった、そして今後も起こるだろう罪の赦しの出来事が語られているからです。

神はご自分のもとを飛び出した者が、苦しみのどん底から立ち帰ってくることを待ち続けておられます。もっとも悲惨なのは、どん底の状況に陥らないで今も遊び続けている人、次いで、どん底の状況になってもまだ父親のもとに帰って来ようとしない人です。帰るべき家を見出だしていない人たちのことを、神はどれほど悲しんでおられるでしょうか。しかし、あの息子のように、すべてを失っても悔い改めて帰って行こうとする人を、神はあの父親のように、喜んで迎えて下さるのです。

（2013 年 6 月 9 日の礼拝説教）牧師　井上　豊